

フィレンツェにおけるファッションショー

ー 海外での作品の発表とその効果 ー

Fashion Show in Florence Presentation of Their Own Works in Oversea and Its' Effect

村上 眞知子

Murakami Machiko

Abstract

Association of Japan Design and Culture Society (NDK) Gifu Branch, in which writer is a member of the society, has been organizing fashion contest every year since 2005 to develop young people who study and works in the fields of fashion design and fashion business in Gifu area and to activate fashion business in Gifu area. In October 2008, NDK organized fashion show in Florence, Italy, and presented dresses which were made by students who are studying fashion design in Gifu. Students gained valuable experiences as to present their dresses in the overseas. In this paper, the purpose and the effect of fashion show are reported.

Keywords : Fashion Show, Florence, Fashion Business, Human Resource Development

1. はじめに

筆者も構成員である社団法人日本デザイン文化協会岐阜支部(略称NDK)は、2005年(平成17年)度から、次世代を担う学生をはじめとする若者の人材育成と、地域の主要産業であるファッション産業を活性化することを目的として、デザインコンテストを開催している。このコンテストは、単に作品の優劣をつけ、高い感性をもった人材を発掘するだけでなく、選ばれた学生に対して、NDK会員による制作指導を行い、作品の完成度を上げることを目指している。さらに、一般教育機関では得がたい高度なオートクチュールの技術を伝えることで、ファッション産業全体の技術の向上にも寄与している。さらに、コンテストの発表会場を、2005年度の岐阜市から、翌年は中国浙江省・杭州市へと移し、参加する学生たちの国際感覚を高めることにも寄与してきた。制作された衣装作品は、国内外のファッションショーで発表し高い評価を得ている。以上のような実績を背景として、イタリア・フィレンツェ市でファッションショーを開催するという事業計画の打診が、本協会岐阜支部にあったのが、2008年(平成20年)4月であった。資金面の問題で実施には慎重になっていたが、岐阜県国際交流センター及び岐阜市、岐阜市交流協会、十六地域振興財団からの補助金を受けて、6月に実施が決まった。その後、7月にコンテストを行い、10月にファッションショーを開催したので、その事業概要を報告する。社団法人日本デザイン文化協会は、1955年(昭和30年)日本デザイナー協会の名称で設立された組織である。

東京に本部を置き全国に11の支部を持つ。岐阜支部は1958年(昭和33年)に設立され、現在会員数は正会員14名、賛助会員2名、研究生1名である。

2. 事業の目的

本事業は、①ファッションデザインの本場であるフィレンツェ市で、岐阜のファッションデザイナー及び学生らによる作品をファッションショー形式で披露し、ファッション都市岐阜への理解を深めること、②フィレンツェ市の服飾デザイン関係者、学生らと交流し、岐阜とフィレンツェのデザイン交流を一層深めることによって、岐阜の次世代を担う若者の感性を高め、ファッションビジネスに関わる人材の育成を図ることを目的としている。

フィレンツェ市には、ファッションビジネスにおける世界のトップブランドである、サルバトーレ・フェラガモ、グッチ、ドルチェ&ガッバーナなどの本拠地がある他、世界のファッションビジネスをリードする企業が数多くある。また、隣接するプラート市は、上述の企業に高品質で感性豊かな毛織物、絹織物などの生地を提供する生産地として、ヨーロッパをはじめとして世界的に有名である。一方で、同市はヨーロッパルネッサンス発祥の地であり、旧市街地全体が世界遺産に登録されている他、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ボッティチェリ、ティツィアーノ、ブルネレスキなどの絵画、彫刻、建築など、芸術性の非常に高い作品に、直に触れることができる



写真1 第1回指導会の様子(1) デザイン画を見ながら、パターンメイキングや素材の検討をする学生とNDK会員デザイナー



写真2 第1回指導会の様子(2) 既に基本シルエットの完成に近い学生に、デザイン画を見ながらアドバイスするNDK会員デザイナー

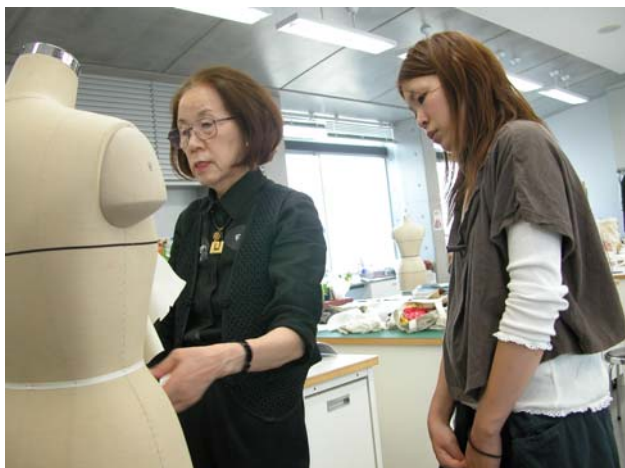


写真3 本学での指導会の様子(1) デザイン画を見ながら、ドレーピングでシルエットの検討をする本学学生とNDK会員デザイナー



写真4 本学での指導会の様子(2) トルソーにシティングを組み立てていくばかりでなく、実際に着用してシルエットの検討をする本学学生とNDK会員デザイナー

街でもある。このように、フィレンツェは、ファッションにおける最新のトレンドとヨーロッパの歴史の深さを体感できる数少ない街のひとつである。一方、ヨーロッパでは、19世紀末からの日本の絵画、工芸、建築室内装飾、モードにおける「ジャポニズム」の影響や、20世紀初頭に川上貞奴らによって紹介された「キモノ」をはじめとした、日本の伝統文化に対する熱いまなざしは現在も衰えていない⁹⁾。このような街で、ルネサンス以後の芸術文化の潮流と最新のファッショントレンドを肌で感じ、そこに学ぶ学生とファッションの作品を通して交流し、同じ目的に向かって意見を交わす機会は、次世代のファッション産業を担う若者にとっては、またとない貴重な経験となる。また、この事業を岐阜県で企画することで、当地における人材育成の大きな力となることが期待される。

フィレンツェにある服飾専門学校ポリモーダは、2007年(平成19年)1月に、本学との間で学術交流協定を結び、互いの教

育、研究分野における交流を続けることが取り決められた。同校は、1986年、ニューヨーク州立大学ファッション工科大学(Fashion Institute of Technology・FIT)との提携のもと、フィレンツェ市、隣接する毛織物産地のプラート市とイタリアファッション業界団体のイニシアティブにより設立されたファッション専門学校である。ファッションデザイン、ファッションマーケティング、マーチャндаイジング、靴、帽子コースなどがある。スポンサー、パートナーは、フェラガモ、グッチ、アルマーニ、ゼニアなど、名だたるイタリアファッション業界を率いる企業のトップであり、これらとの結びつきも非常に深い。1年～3年の修学後、卒業生はこれらの企業でのインターンシップを経て、EU諸国をはじめとする世界各国で職を得ている。ポリモーダには、世界中の才能とファッション情報が集まるといっても過言ではない。

学校は、フィレンツェ旧市内から車で20分足らずの緑に囲ま

フィレンツェにおけるファッションショー



写真5 モデルフィッティングのポリモーダ学生



写真6 衣装、付属品等を確認しモデルフィッティングに備える



写真7 制作者(本学学生)とモデルが通訳を介してウォーキングなどの確認をした



写真8 学生作品のショーに続くNDK会員のショーに向け衣装の最終チェックをする本学学生

れた公園(ヴィラ・ストロツィ)の中に本部、図書館、講義室などがある他、やや離れた場所に制作スタジオ(実習教室)がある。学生数は、約800名、教員数は約90名で、ほとんどが業界で活躍するデザイナーや、フィレンツェ大学の教授陣である。現在の校長は、長くアントワープ王立アカデミー・ファッション科の責任者だったリンダ・ロップパ氏で、2007年1月に就任し、ますます注目を集めている。

本学においても、2005年(平成17年)以来毎年、ポリモーダの教員を招いて、ファッションデザインを学ぶ学生に対して特別講義や作品指導を行っており、その関係を深めている。さらに、今回ファッションショーの会場となったヴェッキオ宮殿は、一部がフィレンツェ市の市庁舎として使われているが、イタリアルネッサンスを代表するメディチ家の住居として使われていた建物である。内部はジョルジョ・バザーリの絵画が壁面を飾る他、ミケランジェロの彫刻が数多く飾られている。また会場

の「五百人の広間」はかつて、ミケランジェロとレオナルド・ダ・ヴィンチが競作で壁画を描くという試みがなされたところである。

3. 事業の概要と評価

3.1 作品の募集と制作

『2008NDKヤングデザインコンテストⅢ イン フィレンツェ』という表題で、岐阜市近隣でファッションデザインを学ぶ学生及びファッション産業に携わる若者を対象にデザイン画を募集した。そして、県内の高等学校、短期大学、大学、専修学校でファッションデザインを学ぶ学生に募集要項を配布した。また岐阜婦人子供服工業組合を介して、県内の企業でのファッション産業従事者に対しても周知した。ファッションショーが10月に開催されることから、7月初旬に作品の募集を開始し、概ね7月末までをデザイン画の募集期間とした。コンテストの



写真9 本学学生作品のモデルフィッティング



写真10 ポリモーダの作品を着た開演間近のモデルたち



写真11 ファッションショーの演出を担当したスタッフと助手が順番を確認した



写真12 ファッションショーが終了し、衣装の後片付けをする本学学生

テーマは、『RE-BORN よみがえる』とし、「^{ふる}故きを^{たず}温ねて新しきを知る」という言葉にあるように、ファッションの最先端を目指す若者が、現代社会の中に息づく伝統の美しさや、古の美しさの中に新しさを見出して、それをファッションデザインで表現することをコンセプトとした。

7月末日の締め切りで、7教育機関から40余点のデザイン画の応募があった。内訳は、高等学校3校、専修学校2校、短大(本学)、大学各1校であった。企業デザイナーからの応募はなかった。比較的作品的募集期間が短かったため、多くの機関からの作品の応募が難しかったと考える。デザイン画の応募後、NDK会員によるデザイン画審査が行なわれた。人材育成という本事業の目的を鑑み、各応募機関から1~2点のデザイン画を選出し、衣装制作を依頼することとなった。本学からの応募は15点あり、11点の制作が決まった。衣装の総制作数は21点である。決定はすぐに各機関を通じて制作者に連絡し、併せて衣装

制作依頼と事業概要の説明会、指導会日程を連絡した。

8月下旬に、本企画の説明会及び第1回指導会が、9月中旬に第2回制作指導会が実施された。第1回の指導会では、パターンメイキングの方法、素材の選定と縫製方法について、デザイナーが学生たちの相談に対して助言した。第2回では、ほぼ完成に近い作品、シーティングによる仮縫い段階の作品など進捗状態がまちまちな中、それぞれの作品に細かな質疑応答があった。9月末日の作品提出後、ファッションショーへの出展作品の選考が行なわれた。平成17年以来行なわれている、制作過程におけるNDK会員による制作指導は、教育機関では経験できないような高級注文服の技術や感性の継承という点で特徴的であり、若い学生、生徒にとっては新鮮で刺激的な経験となった。一方、複数のデザイナーから指導を受けることで、学生の中に戸惑いが見られたこともあった。また、長年培ってきたプロフェッショナルな感性と、未熟ではあるが感じたことをあり

フィレンツェにおけるファッションショー



写真13 本学学生の作品



写真14 本学学生の作品



写真15 本学学生の作品



写真16 本学学生の作品



写真17 本学学生の作品



写真18 本学学生の作品

のままに表現しようとする学生の感性のぶつかり合いが見られ、興味深かった。事業後の本学参加学生に対する聞き取り調査では、作品全体のバランス、細かな縫製テクニックの面で非常に参考になったと感じている半面、デザインに関わる色のコーディネート、アクセントに入れ方、学生のコンセプトをどう表現するかという点においては、一致点が見出せないことのほうが多かったようである。それぞれがデザイナーであるという点で、それぞれの意見を主張しあうのは当然のことである。写真1から写真4は、制作指導会の模様を示している。

衣装作品の最終選考では、ファッションショーで発表する作品を、21作品から15作品に絞り込む予定であった。しかし、デザイン画の段階で参加機関当たりの点数が絞り込まれていることもあり、提出されたすべての作品をファッションショーで発表することとなった。制作者には、各作品において発表までの

修正点が連絡された。また、フィレンツェへ行って直にファッションショーを経験する学生の選考も同時に進められたが、最終的に本学学生3名を含む6名の制作者が決められた。

一方で、ファッションショー演出のためのデザイン画と作品のデータがフィレンツェの担当者とポリモーダに送られた。さらに、ファッションショーのプログラム編集に関するデータのやり取りも行なわれた。

3.2 フィレンツェにおけるファッションショー

フィレンツェにおけるファッションショーは、岐阜の学生等の作品21点とポリモーダの学生の作品15点からなる第一部と、NDK会員3名の作品30点による第二部で構成されている。作品は、参加者が分担して手荷物として運搬した。但し、NDK会員3名の作品に関しては、免税手続きをして運搬し、出入国



写真19 本学学生の作品



写真20 本学学生の作品



写真21 本学学生の作品



写真22 本学学生の作品



写真23 本学学生の作品

ら6名と筆者が、日本人通訳3名を介して出演順と衣装の照合を行った(写真5から写真12)。写真9において、右の女性が持っているカードに、モデル名、出番順、帽子、靴などの情報が書き込まれ衣装と一緒にハンギングされた。殆どの衣装がほぼ問題なくモデルに着てもらえたが、中には全くサイズの合わない衣装もあり、縫代をぎりぎりまで削ったり、ダーツをなくす等の修正を行なってフィッティングを行なった。学生の作品21点の確認を終えた後、NDK会員の作品30点のフィッティングが行なわれ、すべてが終了したのは本番直前であった。

の際に通関手続きが行なわれた。

フィレンツェには、10月18日(土)夜に入り、翌日(19日(日))は、宿泊先のホテルで、作品の荷解き、ハンギング、アイロンかけ、試着修正、付属品のチェックなどを行なった。学生の作品は出発の3日前に本学に集められ、そのまま梱包、空港への発送となったため、すべての作品チェックはこの時点で行なわれた。20日(月)は、ファッションショーと並んで今回の目的のひとつであるポリモーダとの学術交流のために同校を訪問した後、市民交流会にも参加した。21日(火)は、午後5時30分からのファッションショーを控えて、モデルのフィッティングが行なわれた。ヴェッキオ宮殿のなかの市議会議場が当日のフィッティングルームとして使用されていた。フィレンツェやミラノで活躍しているファッションモデル7名に対し、参加した学生

ファッションショーはヴェッキオ宮殿内「五百人の広間」で行なわれた。フィレンツェ市役所、フィレンツェのファッションビジネス関係者、服飾専門学校・ポリモーダ関係者一般市民らが招かれ、舞台、客席の間をモデルが周回する形でショーが行なわれた。ショーでは、ポリモーダの作品15点に続き、岐阜の学生の作品21点が紹介された。筆者も含め本学の学生はフィッティングの後、直ぐにファッションショーのフィッティングで、ポリモーダの学生と一緒にモデルの衣装替えに奔走した。

そのため作品に対する客席の反応や評価に関しては全く情報を得ることができなかった。

本学学生の作品は、染色により既成の素材では表現しきれない色や柄を表わしたものの、巧みなステッチ技法を駆使してシルエットを出したものの、伝統的な紋切型を緻密に切り抜き衣装に

散りばめたもの、着物の構造をアレンジしたものなど、それぞれシルエットや縫製に工夫を凝らした作品だった。写真13から写真23は本学学生の作品である。どのような評価が得られるかを確認する事前の準備を整えておく必要があったと考える。

4. 事業の成果

アパレル・ファッションビジネス産業は、岐阜市及びその周辺地域の主要な産業であり、高付加価値をもった高品質な商品を開発、発信して、岐阜ブランドのパワーアップを図ることはこれからの産業発展の重要な鍵である。次世代の産業を担う若者にとって、高い技術力と国内外での豊富な経験を有するNDK会員の指導のもと、作品を制作し、服飾デザインの本場であるフィレンツェでファッションショーという形で作品を発表すること、地元ファッションデザイン関係者、ファッションビジネス関係者や、同世代の学生と想いを語り合うことは、グローバルなファッションビジネス感覚を養う上で、またそのような人材育成を図る上で極めて有意義である。ファッションショーの様子を動画で見た後、出品学生に、フィレンツェでのファッションショーに出品しモデルが衣装を着て歩いた映像を見た感想を聞き取り調査した。その結果、「衣装の雰囲気にあったモデルが着ていて嬉しかった」、「宮殿でのショーに感動した」という感想を持ち、全員が海外でのショーに作品を発表できる喜びを述べていた。フィレンツェでの事業が終了後、作品を制作した学生、指導した各機関の教員、NDK会員、市役所関係者などによる求評会が行われた。再び作品が一堂に会し、制作者が作品と、デザインコンセプトなどのプレゼンテーションを行った。参加者から、人材育成の観点から事業に対する好意的意見が多数寄せられた。しかし、本学学生への聞き取りによると、総評だけでなく、もっと個々の作品に対する評価やアドバイスがほしかったという意見が多数寄せられた。事業を行ったことの意義はもちろんのこと、個々の学生がこの事業を通してどのように成長するかという観点から、全体としてよかったということばかりでなく、個々の学生の課題についても示唆を与えてやることも必要である。

決して大きな国ではないイタリアが、フランス・パリやアメリカ・ニューヨークと並ぶファッションビジネス大国であることには、決して技術や経済性だけではないノウハウ（たとえば感性）がある。このような地に、ファッションの専門家とともに若者が乗り込んでファッションショーに参加するということは、日本でもあまり前例がない。それを岐阜で学ぶ学生がやるということは、それ自体有意義であるばかりでなく、次世代のファッション産業にとって欠かせない力となる。「岐阜の若者がグローバルな視点で情報を発信し、世界を見つめる」、「フィレンツェのファッションビジネス関係者に、岐阜には感性豊かな若者がいる」ということをアピールできたと考える。この

ような観点から、できれば企業で活動している若い、デザイナーやパターンメーカーにも参加してほしいかと思う。また、この機会を通じて、イタリア・フィレンツェと日本・岐阜の文化、産業の相互理解が一層深まることを期待する。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、事業の遂行のためにコンテストに参加し作品制作を行った本学学生と、多大な支援を惜しまなかった仙石佐和子臨時助手・NDK研究生に感謝いたします。また、写真の一部を提供してくださった、飯原服装専門学校学生古田直文さんと仙石さんに感謝いたします。

参考文献

- 1) 「モードのジャポニズム」、「モードのジャポニズム展」図録、京都服飾文化研究財団編(1996)

(提出期日 平成20年11月28日)